

## 特 集

# 揺らぐジェンダー

## 地域社会から考える

### 編集にあたって

地域研究の雑誌としての『地域研究論集』にジェンダーの特集を組むことは、ある意味ではきわめて危険な試みである。たしかにここ十数年のジェンダー研究の高まりは、各地域を対象とする様々な分野に多くのジェンダーに関連する研究を蓄積させてきた。修士論文や博士論文のなかでも、ジェンダーは現在ではもっとも頻度が高いテーマの一つであろう。何らかの主題や地域にそってこうした論文を集めて雑誌特集を組んだり、論文集を作ること自体は、今ではそれほど難しいことではない。にもかかわらず、地域研究からジェンダーを考えることには、「地域研究」の本質的な意味を問う難しさがある。

その難しさ、あるいは危険性の一つは、地域研究が特定地域を固有の文化的社会的実体をもつものとして捉え、そのなかにジェンダーを位置づける傾向があることだろう。端的な例をあげれば、「インドの女性」といった便宜的な、しかし現在も多用される言辭は、ともすると「インド」という言葉に社会的文化的実体を想定し、「女性」という言葉でその地で暮らすすべての女性たちの交錯する思いや行いを覆ってしまう。皮肉なことに研究対象地域や集団を細分化すればするほど、こうした地域とジェンダーの本質論的な表象の危険も大きくなる。地域研究が、何らかの意味で地域の固有性を前提とする領域であるがゆえに、地域に特有のジェンダーの「かたち」を探し出してしまふのである。地域研究は、人々がそれぞれの状況のもとで紡ぎ出すジェンダーの生成と変転の過程を書き留めることができるだろうか。

この点は、より大きな問題として「誰が、誰を書くのか」という問題でもある。ジェンダー研究において、「普遍的」な人権をかかげる西欧フェミニズムと地域固有の文化伝統を強調する対象地域からの発言のずれについては、すでに多くが語られてきた。地域研究は、その出自として先進国側から「他者」としての世界諸地域を書くということから出発しながら、徐々にそのポジションを修正して「地域から」書くことへの志向性を強めてきた領域である。しかし、こうした「地域からの」地域研究は、対象地域が自らの属さない社会であることへの意識的な眼差しのうえにのみ成立することもあきらかであろう。さらに、その地域もまた重層的な社会であり、言説には様々なレベルで支配の秩序がある。そしていずれにしても「書く」こと自体の権力性は避けることができない。支配と差異化／同化が端的に示されるジェンダーは、地域

研究にとって「地域」とは何か、そしてその地域と個々の研究者とのポジショニングをどのように考えるのか、という重い課題を投げかけているのである。

しかし、地域研究にとってジェンダーを書くことのこうした難しさは、別の見方をすれば地域研究にとってのジェンダー研究の豊かな可能性も示しているだろう。とりわけ、地域の閉鎖性が緩んで、人の移動や情報の伝播が加速している現在、ジェンダーは人々の日常に潜む同化／差異化の政治性がすどく表出する局面である。ジェンダーをめぐる揺らぎや再編過程は、その社会の変容の性格や変容をもたらす様々な力を如実に示しているはずである。課題は、冒頭に述べたような「危険」を意識しつつ、こうした「揺らぎ」を書き留めることができるか否かにかかっている。今回の特集は、この「ジェンダーの揺らぎ」をキーワードに、変容する社会におけるジェンダーに焦点をあてて、地域研究にとってのジェンダーのもつ意味を再考しようとしたものである。この目的に即して、ジェンダー論における研究の政治性を既存の研究を踏まえて論じた川橋論文と、具体的に特定地域を取り上げた速水、長沢、押川の3論文の計4論文で構成している。

川橋範子論文「ポストコロニアル状況における宗教とジェンダーの語り」は、宗教を例にジェンダーの「語り」のもつ政治性を論じたものである。語られる対象と語るものとの間に不可避免的に生じる権力関係に、研究者はどこまで敏感になりうるか。川橋がジェンダー研究の立場から求めた「宗教とジェンダー研究の複数性を単一のポリティクスに還元しない」姿勢は、地域研究にとってのジェンダーへのアプローチの課題でもあろう。

速水洋子論文「差異の交差するところ：北タイ山地における民族間結婚」は北タイ人男性とカレンの女性の通婚を取り上げ、北タイ人の経済的優位が進むなかで、通婚という差異の衝突する事象が結婚式の場でどのように調整され再構築されるかを論じ、民族やエスニシティ研究におけるジェンダー論の可能性を示した。長沢栄治論文「アタバの娘事件を読む：現代エジプト社会における性の象徴性」は、1990年代初頭カイロで発生した「暴行事件」をめぐる様々な言説の形成と転化の過程を丹念に追いながら、現代エジプトにおける性のもつ政治性を論じている。押川文子「インド英字女性雑誌を読む：90年代都市ミドル・クラスの女性言説」は、「ナショナル」なインドを支えてきたミドル・クラスの変容を、英字女性雑誌にみる女性像の変化を追いながら考察した。以上の3論文は、方法としてはまったく異なっているものの、ジェンダーを階層や民族／エスニシティ、経済政治の変動などと重ねながら、その形成と変移の過程を多重的な言説のなかから捉えようとしている点においては共通している。

いうまでもなく「地域」からジェンダーを考えるアプローチの方法は無限にある。今回の特集が、地域研究からジェンダーを考える上で、各地域の研究と、方法論の二面において議論を呼ぶものであってほしいと念じている。

(地域研究企画交流センター教授 押川文子)